

やり直しのできる社会を！

新宿連絡会NEWS

2014.11.23

VOL. 65

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議

〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10

関ビル106号 NPO新宿気付

TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895

<http://www.tokyohomeless.com>

終 わらない冬

笠井和明

今年のやけに短かった夏は、デング熱騒動と共に終わり、長い秋の中、いろいろ思考を繰り返しているうちに、またもや冬の季節に入ろうとしている。

11月5日、新宿中央公園に残る常設テントの撤収が終わった。

戸山公園と同じく、こちらも長い長い時間をかけ、ようやく一つの時代が終わりをむかえつつある。

連絡会が拠点化したからテントが増えたのか、テントが増えたから連絡会が拠点化したのかなんて云う禅問答はこの際、どうでも良い。支援団体として、地域に対する責任は、これにて一応果たしたと考える。いやいや本当に長い間、何かとご迷惑と心配をおかけしました。

こう書くとすべてが終わったような気にもなるのであるが、実際はもっと複雑で、「目に見えるホームレス」も「目に見えにくいホームレス」も共にまだ、連絡会調べで区内200名前後（または、天候次第でそれ以上）は居るのであるから（都の概数調査では念願の3桁を切りそうであるが）、道まだ半ば

であり、もう一段の努力が必要である。

そして、そんな半端な状況で冬を迎える。

越冬と云えば寒空の中、炊き出しを待つホームレス者の姿と云うイメージが定着してしまったのは、一体いつ頃からであろうか？

しかし、そんな寒空の中、北風に吹かれ長時間待たせるなんて、それこそ非人道的であり、飯食ったって風邪引いちゃうよ、との疑問はどこ吹く風で、与える方も、受け取る方もそれがあたかも普通の姿にってしまったのは、我々にも責任がある。どうせやるなら暖かい場所だと、新宿の教会系の人々が建物内での実施へとかつて大きな転換をしたにも関わらず、相も変わらずビル風が吹き抜ける公園に執着していた頃が実に恥ずかしい（いろいろと葛藤していたのであるが）。

反省に反省を重ね、今はこの手法を廃したので、今年の冬は、底辺下層の人々が行う越冬の原点に還ってみようとも思うのであるが、慈善活動であるか否かのスタンスの違いで色々なスタイルがあるので未だ未整理であるが、運動系団体であるとのスタンスからすれば、炊き出しを中心に冬を迎えると云うのは、かなり異端であり、限定的なものであったのであろう。

すなわち、その場だけの「満たし」を優先にする行為は、未来に責任を持つとする運動として、如何なものか？それは結局は慈善活動ではないか？と云う問いに何も回答が出来なかったからでもある。極論からすれば、結局のところ、措置主義の元での慈善活動の質を何一つ超えることはなかったと云う意味では、「社会の同情をひき、弱者を見せ物にし





てきた」良くある駄目な運動であった。

何のための支援か？誰のための支援か？この模索こそが私たちの原点になろう。

そして、あくまで、底辺、あくまで下層の視点で、その人々と共に自らの生活を変えんとする連絡会の伝統は、時代があまねく変わったとしても、変える必要はないと思うし、今更何言われたった変わんねえんだよな、俺たちは、と云う居直りである。

飯を出す事を自己目的化せず、また、制度政策、社会批判にばかり目について変に政治化し、それを当事者に押し付ける姿勢を廃し、共に、いかに、生活の改善を実現していくのか。我々はその模索の繰り返しであるが、分からなくなったら、皆が寝ているところに行く、そして、その場に居る。そして、可能な限り寄り添う。

連絡会の前身部分（人パト班時代）が1993年～94年の冬に新宿や各地でやったことを思い出し、この冬は「路上から撃て」（誰も知らないか）と、同じ事をやろうと思うのである。

もちろん、当時何も持っていなかった時代とは違い、衣食を含めた物資、また、住の部分の緊急宿泊施設を我々は持っているし、そこへ結べる車両もあり、そして、経験豊かな医療班の面々もスタンバイ可能である。

つまりは、フランスのホームレス支援として有名な「サミュ・ソシアル」（本号後段のパトロール班報告と関連付けるとすれば、特殊な経済的被災地とそれを放置していたことで生じる特殊な生活的被災地に対する「面」としての継続的支援？）の真似事ぐらいは体制さえ組みさえすれば自前で可能なくらいの団体となっている。

その試行、すなわち、都市、繁華街地帯においてのホームレス対策の基本、かつてあちこちで言って来た、ホームレス対策、またはホームレス予防施策の都市機能としての仕組み作りを、仲間と共にやろうと思うのであり、それが、連絡会の総決算となる

だろうと考えるのである。

このように、ホームレス者の現状に、ある意味限定した意識性だけは、相も変わらずあると云うか、こだわり続けているのであるが、長年やっていると身体はボロボロで以前より動きは鈍くなるのはある程度仕方がない。長期、高齢化の波は実は我々の側にあつて、長年共に歩いて来た同志は死んでしまったり、身体が動かなくなったり、レスポンスが悪くなったりしている。

なので（？）、今年の越年は、自称ボランティアが勝手に動画を撮って本人の承諾もなく、個人情報垂れ流すような目立った行為はせず、新宿の夜の街に限定し、そこで騒がず、静かに、ポチポチやっというと思うのである。

これはこれで、24時間の体制を効率的に作らなければならないので大変なのであるが、大変なのはいつもと同じ、透明人間よろしく、静かに夜の新宿を見つめ、サンタクロースよろしく、相手を驚かせず、なんとなく恒例の支援の手を差し延べよう。

そこにどのような人が、どのような関係性の中、どのように暮らし、そして、その生活に伴う非日常性とはどのようなものなのか？

あらゆる思い込みを捨て、そのことへの思索を続けよう、それこそが、階級深部（こんな言葉はもはや死語か？）に迫る唯一の道であるし、それこそが、我々の唯一の存在意義である。

何だか、かつて書いていた越年越冬闘争基調報告のようになってしまったが、まあ、そう云うことで、分かる人には分かってもらえれば、結構である。

まあ、こんな内輪のことは多くの人々にとって関心はないと思うので、今流行の政策に対して一言。

何が流行かと云えば、昨年だか、国会で成立した「生活困窮者自立支援法」に基づき、来年4月から全国地方自治体で相談窓口が開設される問題と、旧来のホームレス対策との関連についてである。

この法律は、そもそもホームレスをあまり想定していない設計であると思うのであるが、ここに来て厚生労働省などは、実は想定していると意識的に発言し始めている。

生活困窮者自立支援法の実施を義務付けられる全国市町村自治体からすれば、その圧倒的多数の市町村自治体はホームレスなど大都市の問題で、わが町には居ないし、扱ったこともないし、実態はテレビでしか見た事がないと云うのが現実であろう。ここからして都市と地方との議論は噛み合わないだろう。

ホームレス自立支援法でさえ、今や全額国庫負担にもかかわらず全国津々浦々に自立支援センターは設置されていないのは、まさに実態が少なく、また、需要もなく、運用的には都会に押し付けてしまえば良いからであり、実質的に大都市問題への対応策でしかなかった。それを生活困窮者と云う名で一般化させ、全国各地に相談窓口を設置したところで、ホームレス者は他の大都市圏に押しつけまわすことには変わりはないであろう。何せ扱ったことがないのであるからして、そんな面倒なことはやろうとはしないのが行政の常である。

生活困窮者自立支援法が主要に想定しているのは誰かと云うと、地方に税収をあまりもたらさないフリーターやニート、引きこもり者や雇用保険が切れかかっている失業者、家賃を払えなくなった失業者やギャンブル依存症と云う、ある意味「地方のやっかい者」（言葉は悪いが）がストレートに対象となることが考えられる。もちろん、これらの人々を早期に補足し、支援をかけるのは悪いことではないが、それにしても、出口がその地になればせっかく支援網にかけたとしても、それらの人々はその地を離れ、都会へ都会へと自らの生活のために移動してしまう。

都会は人に溢れ、地方は人が減りと、その構造が解消されなければ、このような立派な理念は、比較的安定している中小都市でしか効果は発揮しないであろう。

あえて云えば、これらは中間層都市のための施策であり、制度を投入することで中間層の下流化の危機を一定解消し、他方上から目線で貧困層を支援することで自己満足的な地域を福祉のオブラートの中で作り出していこうとするための施策であるとも言えよう。私には中間層の人々が貧困層の人の周りをうろちょろし始め、そして囲い込み、監視し、相談所に押しつけると言う嫌なイメージしか、ここからは浮かばない。

これじゃ、逃げるのが当たり前で、そもそも自分にあった仕事がない都市で生きていこうなんてのは拷問に等しい。

仕事と共に人は動く。これは底辺下層の一貫した流儀であり、それを否定するのであれば、その地に仕事を作り出すしかない。その意味で安倍さんが立ち上げた「地域創生本部」は、まことに正しく、これと一体的に生活困窮者自立支援法を施行しないと、所詮だめな制度だと、全国自治体から総スカンを食らうことであろう。

それはそれでも良いけどねと、いつもなら平然としていられるのであるが、厚生労働省が東京都と特

別区長会連名の「ホームレス対策の更なる推進にかかる緊急要望」をまったく無視し、生活困窮者自立支援法の一時生活支援事業内にホームレス自立支援センター機能等をまる呑みし、手をつけようとしているものだから、様々なところで「それはないだろ」との声が挙っている。

そもそも生活困窮者自立支援法の対象には、生活保護受給者は含まれておらず、生活保護受給に至りそうな人々を補足し、支援をすることで、結果的に保護受給増を回避させようとする制度である。つまりは「おそれの有るもの」が対象であり、既に「落ちてしまった人」は対象になりにくい（制度も給付は少なく、相談支援が中心である）法体系である。ホームレス者とは生活保護受給すらしておらず、現に困窮はしていても、そこからせめて最低限生活まで引き上げることが一般福祉施策的には困難性が伴う対象である。それと、最低限生活に落ちないようとする対象者とごった煮にして、一体どうしようとするのか？ホームレス自立支援法にある「予防策」を切り離して、一般法に格上げしたのが生活困窮者自立支援法であるなら、既にホームレス生活を余儀なくされている人々に対する施策は、根拠法があろうがなかろうが、引き続き、国庫負担で、国が責任を持って大都市圏問題に取り組むのが筋と云うものであろう。

事実、ホームレス自立支援法の失効までに全国ホームレス者の数が0になることは考えられず（我々も努力はしているのであるが）、法の失効が、問題解決の「達成」には至らないのは自明である。

あえて言うならば、生活保護受給者にせよ、ホームレス者にせよ、その課題解決への近道は生活保護法本体とその関連法規の再改正と一定の整理が必要だと思う。近視眼的な人々は生活保護と言え、その入り口しか見ず、また批判しやすい「貧困ビジネス」しか語らないが、その現場と言うのは壮絶なもので、受けたら逃げる、逃げたら受ける、そうこう



している間に健康問題、高齢問題が発生し、そして、それをまた一般施策の方に持っていけば、またまた逃げ、居宅化したから安心だなんて口が裂けて言えないのが現状である。生活困窮者の生活支援に金を出すほど余裕があるなら、こっちに回してくれと大都市圏の福祉事務所の職員は内心きつとそう思っていると思われる。生活保護受給後の体制とメニューと財源こそが問題であり、福祉の「豊かさ」は、ここにこそなければならぬと思うのであるが。

その他、国の責任、社会の責任はどうなっているんですか？実態調査もしないんですか？計画も立てないんですか？これまでのノウハウはどう生かしていけるんですか？あんたら本当に路上の中に入り込めるんですか？できれば管理されたくない人々をどうやって管理するのですか？一回こっきりの支援でどうかなるものなのですか？適正化問題や人権問題はどうなるんですか？自立支援センターの支援内容を本当に理解しているんですか？自立支援センターだけ残しておけばどうかなると安易に思っているんじゃないですか？

と、疑問に思うことしきりである。

とりわけ、東京などは2020年のオリンピック開催が控えており、それまでに問題の解決と、「予防策」＝ホームレスにならないための都市機能をしつかりと張り巡らせることが目標ともなろう。国の言う事をほいほい聞いて、当面の課題に向き合えなければ都政も都民からそっぽを向かれてしまうであろう。東京都はそのための手段として生活困窮者自立支援法を使えば良いだけで、国がホームレス対策をぐちゃぐちゃにするのであれば、それに反し東京都の懐の深さを示した伝統があり、かつ効果的に進んでいる路上生活者対策の独自路線を取るべきであろう。ここまで来れば東京都が今度は試されていると言う構造にもなってくる。まあ、どこも金は負担したくないのであろうが、そんなことを言っていたら何も解決はしない。どこかが泥をかぶるしかないし、それを集めてくるのが役人さんの一番のお仕事だったりもする。まあ、当面はそこに期待をしておこう。

問題は見えるホームレスの数が減ったからと云って、ホームレス者がいなくなった訳ではないと言う認識が東京都福祉保健局にあまりにもないことである。ホームレス対策からすれば、都市公園問題は突破口の課題でしかなく、本丸は駅ターミナルで野宿をせざるをえない流動層であることは、これまで口酸っぱく交渉時には言ってきたのであるが、それが不幸にして伝承されていない。現在、東京を見回しても都市公園問題でさえ、一部には残ってしまっ

ているのに、この時期に手綱を緩めるのは、都市にとってまさに自殺行為である。一般都民は特定の場所と時間にかなげなければホームレス者を見ることはないかも知れないが、都庁職員などは雨など降れば100名単位の仲間が雨宿りのため都庁を利用しているのは、よくご存知の筈である。それを目の辺りにして解決したとはとうてい言えないだろうし、どうかしたいとも思うであろう。それですら特別区に責を押しつけ、のうのうとしている態度が、デング熱問題での代々木公園のような最悪な事態（知る人ぞ知る）を迎えるのである。

都市問題として発生したホームレス問題は、都市問題として解決しなければならない。そして、そのことが、都市下層の生活を間違いなく底上げしてくれる。また、ドカンと落とされたら、これまで官民で何をやってきたのかと思わざるを得ない。

対策と云うのは、マスコミをベースにした世論の感情論や、解りやすく白黒つけようとするところとは別のところで議論をしなければならないと思うのであるが、政策担当者はテレビとネットと目立ちたがりの有識者しか見ていないのじゃないかと思うことしきりである。まあ、それは楽ではあるが、そんなことをしていたら現場との乖離はますます広がってしまうだろう。

まあ、それもこの世ならば、我々はもうしばらく、その不毛さと付き合うこととなるであろう。

いずれにせよ、冬である。

人を地獄（他所）へと送ってしまったら、そこにはその人の生活と云うものがある。送って終わりにはならないものである（見えなくして終わりではない）。閻魔（社会）は地獄を人が生きられる場所に変えなければならない。それが閻魔の責でもある。

地獄の喩えが、路上でも、自立支援でも、生活保護でも、同じである。

我々は、ようやく車善七の「痛み」が解りかけているのかも知れない。

(了)

1

2014年、いくつかの災害が記憶に刻まれた。惨事をまぬかれつつ、東京も無傷でなかった。2月、二週にわたり大雪に見舞われた。そして9月、デング熱が発生、新宿は渦中の地になった。

路上へ向け、いつもと異なる関心が払われた。ある雑誌は2月に「首都極寒サバイバル『ホームレス』はどうやって生き残った」(『週刊新潮』)と題し、記事を書いた。同じ誌面を、9月の時は「『デング熱』でホームレスに吹く冷風」と説明つきの写真が飾った。中央公園へ続く通りで、ダンボールを囲う男性が撮られている。感染場所を逃れ、しばし休息の印象をかもし意図だろう。

興味本位の報道にも、一面の真実がうかがえる。野宿の状態と防災は相性が悪い。雪が降ったからといって、私室や社屋へこもりにくい。外で寝ながら、蚊に刺されずすむ環境は望み薄。ふつうなら軽微なことが如実に響く。

もしかすると、災害の有無にこだわるのは遠回りかもしれない。路上でなされる支援は、被災地のそれとかなり重なる。食事や防寒を気づかい、医療と生活の相談を受け、臨時で入れる部屋を探す。彼らの置かれた状態は、まるで本当の災害を先取りしている。「ある意味では、野宿者はいわば『慢性的な被災生活者』である。逆に言えば、震災被災者はいわば『急性の野宿者』なのだろう」(生田武志『ルポ最底辺』)。

お互いの仲を、原因の違いで裂くことはできる。被災者は自然の力で、野宿者は主に経済的な理由から家を失う。この図式は、なぜ後者が自力での回復を迫られがちなのか、詳しく教えてくれない。

性別や年齢など、いくらか近い条件が困苦を

取り巻く。背景に構造的な要因がひそむなら、個人で抗うだけでは荷が重くないだろうか。ちょうど、地面の揺れに対してと同じように。「…自然災害による難民と経済・社会政策の誤りによって生み出された難民とをあえて区別することは正当とはいえない」(笹沼弘志『ホームレスと自立/排除』)。

08年暮れ、両者の区別を超えるかの出来事が起こった。日比谷公園を埋めた人の波は、さながら被災地だった。ただし、天災ならぬ人災の結果として、主催者たちはそう唱えた。「…東京のど真ん中の公園…そんな場所に被災地のようなテント村が突如出現したのだ。原因は『派遣切り』である。改めて今回の事態が『人災』だと思えてきた」(年越し派遣村実行委員会編『派遣村 国を動かした6日間』)。

2

野宿の仲間と会い、次のような場合があると考えてみてほしい。本人が福祉事務所を訪れ、体調が悪く通院が決まる。独歩が困難で、病院へ付き添う。複数の検査や、科の受診が課せられたりする。あるいは役所で調べた挙句、他区で生活保護にかかっているとわかる。やはり同行するが担当者がおらず、なかなか戻らない。

二人で椅子に座り、とにかく待つ。言葉は交わすが、話が弾むほどではない。肩を並べ、うたた寝するのが関の山。退屈なはずなのに、どこか満たされてもいる。なんとなく開放的で、晴れがましい気がする。

状況次第で、主治医や担当者と交渉に臨む。本人がどう反応するか心もとない。たまたま同席しているだけで、成算に乏しい。

不安をぬぐうため、こんななぐさめを頭に描く。経験を積んだ精神科医でさえ、患者との間柄は運任せなところがあるらしいと。「われわれのアプローチにはマスターキーはないだろうと思う。いくつかのものを組み合わせて解決していくこと、そして多くは偶然に支えられてやっているということ、しかし、偶然というのは活用しようということ…」(中井久夫『「つながり」の精神病理』)。

似たことが福祉の分野でいわれる。ある人の先行きは、往々にして不測の事態と対をなす。「クライエントが自ら問題を克服する方法、方向もつねに同じではない。『正しい』と考えた方向に自己実現を



目指しても、挫折を味わうことがある。偶然の出来事によって、生活が思わぬ方向に一変することもある」(尾崎新編『「ゆらぐ」ことのできる力 ゆらぎと社会福祉実践』)。

この伝でいけば、デング熱もまた変化を促す一撃だった。中央公園ではほかに、ある区域で木の伐採作業が予定されていた。それをあわせ、約40名が園を離れた。うち何人かは、はつきり野宿でない状態へ移った。福祉事務所は、ふだんよりきめの細かい態勢を組んだ。

災害を踏み台にするのは、不謹慎に聞こえる。あからさまな〈火事場どろぼう〉は自治体、野宿者ともに好ましくないだろう。そこまででなければ、折り合いながら苦境を乗り切る余地がある。〈災い転じて福(祉)となす〉発想は、路上を生き抜くしたたかさや無縁でなく思える。

3

災害は、社会の各層へ影響を及ぼす。交通網や建物、健康、人心が揺さぶられる。デング熱では公園が閉鎖ないし立ち入り制限の憂き目にあった。病勢自体は、さほど深刻でなかったらしい。支援にかかわる医師らは「大丈夫、おじさんたちは強い、この程度でやられはしない」といつていた。心配されたのは、最後の点だったろう。感染が飛び火し、〈ホームレス原因説〉を勢いづかせる恐れがあった。活動する個人、団体が冷静さを保つよう声明を発した。

どんな激しい天変も、人為をまったく拒むわけではない。あらかじめ備えることで、物心両面の動揺が抑えられる。逆に手抜き工事や、いたづらな疑いは混乱を助長する。

過去の例をひもとくと、被災地において野宿者は周辺化される傾向にある。阪神・淡路の震災後、神戸市の当局は避難所で調査を行う。その際、係

員に対し「不適格者(ホームレス、罹災証明のない人)には出ていってもらよう指導」なる通達を出す。「震災前から野宿生活をしてきた人々は、『被災者』のカテゴリーから外されることによって、救援の対象外に置かれたのである」(青木秀男編『場所をあける！ 寄せ場 / ホームレスの社会学』)。

派遣村の実行委員は、原状にかかわらず受け入れる方針を立てる。意に沿い、村には派遣切りの失職者と元からの野宿者が混在する。すると、寄付に来た市民は「ホームレスにカンパしたんじゃない」、炊き出しに並ぶ失職者が「どうしてホームレスがここに並んでいるんだ」(宇都宮健児、湯浅誠編『派遣村 何が問われているのか』)と非難をあげる。

〈ホームレス〉の原義は、広く住まいが不安定な状態を指す。英語が輸入され、発音の仕方は変わった。内実はかつて使われていた語の、偏った含みを脱していない。

釜ヶ崎の関係者は、こんなふうに憤っている。「…みんなおなじ“家をなくした人”、たちなんよ。だけど結局、そこでも“自分らと、あいつらホームレスはちがう”って線引きして、あくまで差別する。おんなじ被災者やのに、“おまえらの来るとこやない”って、公園からも避難所からも追い出していく」(北村年子『「ホームレス」襲撃事件と子どもたち』)。

4

実のところ災害は、分断より協同こそをもたらずとする説も捨てがたい。危機にあつて人々は励まし合い、知恵をしぼり、惜しみなく与える。案に反し、命令がなくとも落ち着いてふるまう。

大事なのは、それらがまれでないことだろう。文化的な特質にとどまらず、世にあまねく見出されるという。さらに急に降ってわくのではなく、日ごろからそれとなく発揮されうるのだとも。「災害は市民生活への欲求や可能性に向かって、一風変わった窓を開けてくれるが、そこに現れたものは、他の場所でも、普段でも、別の異状な状況においても重要だ」(レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』高月園子訳)。

自費すれば、こちらの活動もこうした兆しに類するのかもしれない。路上で声をかけ、病院へ同行するのが、被災地ばりの連帯へ道を拓く。そう考えると、少し面映ゆい。第一、必ずしも調和的といえない。待合室で共に過ごすのはせいぜい半日、長くても夕方までに決着する。それ以前、ちょっと目を離れたすきに、本人がいなくなったりする。いずれ散じる結びつきで、〈寄り添う〉より〈居合わせる〉といったほうがふさわしい。





路上でしのぐ日々の苦勞に、天氣の崩れがある。東京の雨模様は例年100日前後(日降水量1mm以上)、半分が本降りとして、週ごとにぬれない工夫がいる。

幸い新宿では第2都庁舎のピロティ(屋根つきの素通し部)が開放され、多くて150名ほどが身を寄せる。10月のある雨の日、約60名に晴天時の寝場所を尋ねて回った。12名が新宿外の地名を答えた。パトロールの経験から、雨天に接する野宿者の延べ数が2~3割増しになるのはわかっていた。一時的な流入が見込まれた。聞き取られた5分の1の割合は、これを裏付ける結果となった。内訳は以下の通りで、思惑がはずれた。「代々木(公園) 2」「渋谷 2」「池袋 1」「皇居(日比谷) 1」「東京駅 1」「上野 3」「あちこち(定まらず) 2」。

新宿の地理上、代々木・渋谷・池袋が起点なのは予測できた。加えて、23区の東側から集まっている。先の頻度が正しければ彼らはもはや新宿のなじみで、寄留地は文字通り都庁と呼べる。

自治体はこぞって災害に強い街を目指そうとする。雨宿りに軒先を貸すくらいのこと、準備が始められる。

5

被災者と野宿者はたぶん似ている、そういうだけでは足りないだろう。同じ現象の受け止め方が、適応度によって左右される。雨の中、都庁へたどり着けるならまだいい。それぞれの地元におそらく身動きならない人たちが残されている。

野宿者には、様々な想念がまとわりつく。男性(性)、中高年、日雇い。怠惰、あきらめ、自由。排除、抵抗、希望。固定して語りつくせず、少しずつあてはまる。

〈その人らしさ〉は行きつ戻りつ、偶発事をからめながら巧まれていく。そのことを改めて問い返し

たい。「…主体とはあらかじめ自立してあるようなものではなく、むしろ複数ある選択肢のあいだで迷い、半ば偶然のようであったとしても決断し…その終わりのない過程のなかにこそ表れるようなものではないだろうか」(丸山里美『女性ホームレスとして生きる』)。

最後に連想をもうひとつ、しかも現実的な。路上を巡っていると、人の死を身近に覚える。昔ほどでないが、行き倒れの危険は消せない。衰弱によるのはもちろん、自ら下した終幕と面するのはつらい。無力感がつのる。

そんな時ですら、病院や福祉事務所の椅子で二人して待つ、あの場の雰囲気はずかしく混じる。遅きに失したけれど、ほかの誰でもない、まさにこちらが居合わせた。妙な感慨はすぐ去り、警察と消防へ通報を急ぐ。

ささいなきっかけが束の間の親しみを経て、のっぴきならない段へ至る。一連のきわどさについて、横浜で勤めたケースワーカー(後に研究職)が触れている。

ドヤに住む高齢者、病弱者とのかかわりは、暗に次のことを意味する。「『ケース』と私たちが呼ぶ人とケースワーカーの関係も、偶然性に支配されているようなものだ。それにもかかわらず、寿町では、それが自分の死の処理を委ねるという現実を含んでいる。…ここにいるケースワーカーは、人間の死の社会的処理をするという重要な仕事を担っていると言ってもいい」(須藤八千代『ソーシャルワークの作業場 寿という街』)。

メント・モリ、死を想え、そして奇遇を。冬が来て、路上はまた被災地に近づく。

新宿連絡会 会計報告

2014年度6-10月期

今期も多くのご支援を頂き、ありがとうございます。

頂いたお金は連絡会の運営費や仲間のために全て使い切っております。現在累積赤字中となっておりますが、必要性のある活動が続きますので、今後ともご支援宜しくお願い致します。

2014年度 6-10月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		消耗品費	15,789
1 寄付金収入	376,175	事務用品費	3,164
		衛生管理費	8,714
計上収入合計	376,175	支払手数料	1,756
		車両費	5,678
II 計上支出の部			
1 事業費		計上支出合計	369,033
弁当/おにぎり事業	270,021	計上収支差額	7142
その他活動事業	5,756	前期収支差額	△849,697
2 管理費		次期繰越金	△842,555
旅費交通費	29,115		
通信費	29,040		

2014~2015

終わらない冬

新宿越年越冬Zero

2014年12月28日(日)~2015年1月5日(月)

<ところ> 新宿区、及び周辺の路上

北風に吹かれ、今年の年末年始は新宿の夜の地に連日出没します。

越冬闘争資金カンパ
毛布、ホカロン、
医薬品
募集中!!

おにバト準備 28日~4日まで13時半より高田馬場事務所
ミーティングは28日~4日まで16時より高田馬場事務所
餅つき大会30日、新春の会は4日、臨時宿泊施設も用意し、あとはひたすら朝まで歩き回り、仲間の寝床を静かに支えます。

主催・新宿連絡会03-6826-7802

●活動カンパ 振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.giveone.net/>「Give One (ギブワン)」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします●

★郵便物は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。